

## 加盟組合企業代表 豊田社長からのメッセージ全文

豊田でございます。この度は、全トヨタ労連の 50 周年、誠におめでとうございます。

皆様には、日頃よりトヨタグループの発展にお力添えいただき、心よりお礼申し上げます。

また、日々の生産変動に対応いただいております製造現場・輸送現場の皆様、長納期が続く中でお客様との絆をつないでくださっている販売店の皆様のご尽力に、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

今年は、全トヨタ労連の 50 周年に加えて、トヨタの「労使宣言」締結から 60 年という節目の年でもございます。

トヨタの歴史において、絶対に忘れてはならない出来事が、1950 年の労働争議です。

会社の経営状況が急速に悪化し、トヨタの労使は、厳しい対立関係に陥りました。

当時、社長であった豊田喜一郎は、「苦楽をともにしてきた仲間の夢や生活を守りたい」という思いと、「会社がつぶれて、自動車産業の将来を絶ってはならない」という思いの中で悩みに悩んだすえ、従業員の四分の一にあたる、2000 名以上の人員整理という苦渋の決断をいたしました。

そして、その責任を取り、自らも社長を辞任いたしました。

「対立からは、何も生まれない」。「人材はコストではなく、財産」。これが、トヨタの労使で受け継がれる教訓となりました。

その後、会社・組合双方の先人たちは、長い時間をかけて、膝をつきあわせ、徹底的に話し合いを重ねました。

そして、実に 12 年の歳月を費やし、1962 年に、「会社は従業員の幸せのために、従業員は会社の繁栄のために、互いに力を尽くす」という「労使相互信頼」を基盤とする「労使宣言」の締結に至りました。

その後も、オイルショック、バブル崩壊、リーマンショック後の赤字転落、超円高をはじめとする 6 重苦など、今日までの歩みは、苦難の連続でしたが、そうした危機に直面するたびに、「労使宣言」の精神に立ち返ってまいりました。

社長就任以来、私が何より重く受け止めてきましたのは、この労使相互信頼の歴史でした。だからこそ、私は必ず、労使の話し合いの場に参加しております。

現在、トヨタでは、労使協議の議長はおやじの河合さんが務めております。

現場を知り尽くした河合さんの前では、格好のいい理屈は通用しません。ましてや、嘘は、すぐに見抜かれてしまいます。

トヨタの話し合いは、現場のおやじが仕切る、まさに「家族の話し合い」なのです。

では、「社長はどういう立場なのか？」という、労使のどちらにもつかない「行司役」です。

私は、「従業員の幸せ」と「会社の発展」、その双方を常に思いながら、全身全霊でそれぞれの話を聞き、「今回は、会社の勝ち」、「今の議論は、組合が職場の現実を伝えている」など、肌身離さずもっている小さなノートに、感想を書き込んでおります。

そんな中で、今年、私たちの労使協議は、大きく変化いたしました。

「自動車産業で働く 550 万人のために」、「組合に属していない 7 割の人たちのために」。それが、私たちのブレない軸になりました。そして、全トヨタ労連を通じて、仕入先や販売店の皆様も、私たちの話し合いに参加し、声を上げてくださるようになりました。

「労使宣言」では、「労使相互信頼」に加えて、「自動車産業の興隆を通じて、国民経済の発展に寄与する」というトヨタの「使命」も誓っております。

そして今、カーボンニュートラルや「成長と分配」の実現が求められる中、私たちの課題は、産業全体、社会全体に広がってきております。

現場の事実に向き合い、ともに悩み、本音で話し合う。そして、「自動車産業の仲間のため」、「日本の未来のため」に、ともに行動していく。そんな労使の存在が、今、何よりも重要になってきていると感じております。

全トヨタ労連のもと、トヨタグループ全体でこうした労使関係を実現し、自動車に関わるすべての人の幸せを実現できるよう、今日この場にいる皆様と心ひとつに動いてまいりたいと思っております。

最後になりますが、トヨタの河合おやじは、今年、入社 60 年目になります。

本当は、全トヨタ労連よりも長い歴史をもち、誰よりもトヨタの労使関係を知っている河合おやじに話をしてもらえるとよかったです。本日は、将来、実は私は組合委員長になりたいと思っておりますので、そんな私が代わりに挨拶をさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

そして、先ほど見させていただいた(全ト作成の 50 周年記念)ビデオの最後、「大丈夫」という言葉で締めくくられていました。「大丈夫」という言葉には、それぞれの字に「人」が必ず入っています。何かをやる時、「大丈夫」と言う時には、自分の周りには 3 人の支えがいるという意味だと思えます。全トの皆さんが心ひとつにやっつけば、その 3 倍もの人と一緒になれば、必ず、どんな変化にも「大丈夫」ということで立ち向かえるのではないかと思います。

そして、ここにおられる皆さんと、「ワンチーム」のかけ声で最後終わらせていただきたいと思えます。私が「ワンチーム」と言いましたら、大変恐縮ですが、3 つ手拍子をお願いできませんでしょうか。

その後、全員で、元気な声を出して「全ト 50！」と言って締めさせていただきたいと思えます。簡単なことなので練習はいたしません。では、まいります。

「ワンチーム！全ト 50！」。